



舛次 崇 Takashi Shuji

1974年～ /兵庫県在住

舛次さんは満面の笑顔で、ゆうゆうとアトリエに入ってきます。目の前に置かれたモチーフを嬉しそうにまじまじと見て、小首をかしげています。そのうちノツリと紙に覆い被さり、いきなり黒いかたまりを描きはじめる。そんな描き方で彼の絵ははじまります。

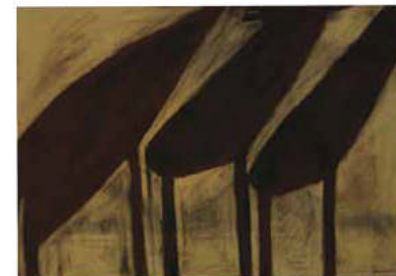
彼は18歳の頃、福祉施設の絵画クラブに参加しました。描きはじめて頃には、大好きな阪神タイガースのスコアボードの絵ばかりを描いていました。すべてのボード文字を正確に描くのですが、その後必ずそれを同じ黒のクレヨンで真っ黒く塗りつぶしてゆくのです。そういう絵が何枚も続き、2年ほど経った頃のある日、たまたま机の上にあった植木鉢を見て描いたのですが、独特の視野で捉えたカタチが実にユニークな絵でした。それ以後、植物の鉢などの日常品を見て描いてゆくようになったのです。

彼は対象物をじっと見てはいるのですが、その形を写し取っているのではなく、どうやらそのモチーフから受ける「感じ」を直感的に受信して描いているようです。また彼の意識は、全体のバランスなどには向いていません。描き進んで紙の端がくると、描いていた形はそこで深くブツリと終わってしまいます。まさに自然流で構成は決まってゆくようなのです。予想もつかない緊張感をはらんだ構図。生み出されるユニークな形。絶妙な配色。それらは美術教育とは無縁のところから生まれてくるのです。

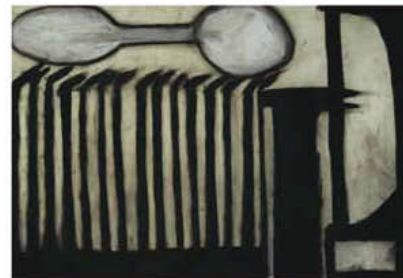
描画は4～5時間ほど続きます。にっこりして立ち上がり、トイレに向かうのが「オワりました」のサインです。彼は日常では福祉施設でミシン縫製の仕事をしています。彼の作品は大変人気が高いのですが、彼はそのことに興味がありません。



『パンチとドライバーとノコギリとパンチ』2006年 水彩紙にパステル 546×790mm



『きりん2』2008年 厚紙にパステル 539×768mm



『蠟燭と糸ノコとトンカチ』2006年 水彩紙にパステル 547×790mm

舛次 崇